

2004年度 大学院法務研究科
法学既修者認定試験
刑 法
(問 題)

問題 1

甲は、A に対して殴る蹴るといった暴行を加えて瀕死の重傷を負わせ、人通りの少ない岸壁に放置して立ち去ったところ、通りかかった乙が、さらに A に対して暴行を加え、その結果、A は死亡するに至った。なお、A の死因となった脳の損傷は、甲の暴行によって既に生じており、乙の暴行はこの損傷を拡大させ、死亡時刻を数分程度早めたものであった。

甲及び乙の罪責を論ぜよ。

問題 2

A 男は、B 女と居酒屋で飲食し、酩酊した同女をタクシーで帰宅させようと店外へ連れ出し、タクシーが来るまで介抱していたところ、大声を出して暴れた同女と揉み合う状態となった。そこを通りかかったイギリス人甲（来日 8 年目で空手 3 段の腕前を有するが、日本語の理解力はいまだ不十分である）は、B 女がコンクリート路面に転倒するのを目撃して、A 男が B 女に暴行を加えているものと思い込み、B 女を助け起こそうとした。その際、B 女が「ヘルプミー」と繰り返し叫んだので、甲が A 男の方に向きを変え、攻撃を止めるようにという意味で両手を差し出して A 男に近づいたところ、A 男はボクシングのファイティングポーズのような姿勢をとったため、自分にも殴りかかってくるものと誤信した甲は、自己および B 女の身体を防衛するため、とっさに空手技である回し蹴りをして、左足を A 男の右顔面付近に当てた。その結果、A 男は、路上に転倒して頭蓋骨骨折等の傷害を負い、8 日後に死亡した。と同時に、甲が回し蹴りをした際、履いていた靴が脱げて、たまたま通行中の C の右目にあたり、C も負傷した。

甲の罪責を論ぜよ。